

日本の集合住宅

——将来へ向けた新しい集合住宅のあり方 第10回 長谷工 住まいのデザイン コンペティションへ向けて

隈研吾×乾久美子×藤本壮介×大栗育夫×池上一夫

第10回を迎える「長谷工 住まいのデザイン コンペティション」。2007年に長谷工コーポレーション創業70周年を記念してスタートしました。これまで建築を志す多くの学生に集合住宅にまつわる課題に取り組んでもらいました。前回の第9回「100歳の集合住宅」では、人が歳を重ねた時にどのように住まうのかについて考えてもらいました。10回目の節目となる今回は、長谷工コーポレーションの大栗会長にも特別審査委員として参加していただきます。開催に先立ち、今回の課題や、今、集合住宅をどう考えるかなどを審査委員の方々に話し合っていました。（編）

時代の先を意識した提案を

——前回の課題「100歳の集合住宅」と入賞案はいかがでしたか。

隈 このデザインコンペティションの応募者は基本的に若者なので、果たして自分が100歳になった時のことを想像できるのか心配でしたが、審査で応募案を見るとある程度パターン化した無理のない提案が多かった。言い換えれば、じじくさいと言うか、老成した若者が多いのかなと少し心配にもなりました（笑）。

乾 前回に限らずこの住まいのデザインコンペティションを見れば、その時に集合住宅で考えなければいけないことが分かり、面白いですね。第1回の課題「300人のための集合住宅」に始まり、4回目までは数を扱ったテーマとし、集合住宅という形式の中で何ができるかを考えてもらいました。第5回からは、その時々々に響く集合住宅を取り巻く社会的なテーマを取り上げ、集合住宅がどうあるべきかを問いました。このように数でいくか、時事的な問題を問いかけるか、以上ふたつの方向性で進めてきたのがこれまでの流れです。

池上 そうですね。第5回からは社会が抱えている課題と集合住宅を絡めて考えるテーマが続き、その集大成が前回のテーマであったように思いま

す。最優秀賞は具体性があり、かつ斬新であったと思います。結果としては面白い提案が多く、よいテーマでしたね。

藤本 今年のテーマでは、自分が古い、子どもが成長し、成長した子どもにさらに子どもが生まれてくるという長い時間軸を想定しました。そこで見えてくる集合住宅や、社会像、家族像、都市像などの背景を考える必要があり、つまりは自分たちがどんな社会に住みたいか、ということに結びつけて考えることができたのではないのでしょうか。

大栗 第9回では日本が直面している課題に取り組むことができたと思います。高齢化以外にも老朽化したマンションの建て替えなど、これから解決していかなければいけない課題は数多くありますが、今回もこれからの住宅事情がどのようになり、それに対してどう考えるのか、そこを意識した提案を期待したいと思います。

藤本 前回の入賞案を見返してみると、昭和を感じさせるノスタルジックな案が多いように思いました。未来に問いかけるというよりは、「昔のコミュニティってよかったよね」という提案が多く、同じようなアイデアに収束してしまって大丈夫のかなという不安も少しありました。今回は、これからはこうなっていくのかなという将来の提案が見えてくるものを期待したいですね。

周囲にも変化を与える建築

——具体的に今回の課題ではどういうことを考えるとういでしょうか。

隈 実は、第9回の課題を考えた時に既に「日本の集合住宅」というアイデアが出ていました。10回という節目の時にこのテーマを挙げてみたいと思います。日本の都市や、周辺環境を考え関係を構築すること、エネルギー問題やICTの活用、少子化やライフスタイルの変化、コミュニティの形成、

社会との関わり、都市の更新方法など日本のさまざまな現状から集合住宅のあり方を、この辺りで一度きちんと考えてみてはどうでしょうか。

乾 そのように大きなテーマを考えてもいいかもしれませんが、ただ、「日本」という言葉にどんな意味を込めるのか、もう少し絞るべきだと思います。更新とい

うお話がありましたが、インフラの更新や建物の建て替えは、今私たちが直面している問題です。例えば、そのことについて考えてみてはどうでしょうか。

藤本 海外では都市の更新の仕方日本とは異なるように思います。僕は今フランスでプロジェクトを進行しているのですが、フランスではマンションをつくる時に将来に亘って長く存続していることを想定し、ある種の都市資産として、敷地周辺、エリア全体の価値を上げるような計画が求められます。つまり、その計画が起爆剤となって、地域を活性化させるような役割を担うのです。街をつくることは、大きな都市計画レベルだけではなく、個々の生活レベルまで検討するという意識まで含み、そのスタンスに改めて共感しました。街と上手く連続したり、街を豊かにしていくという点では、日本の集合住宅はまだまだ考える余地があると思います。

池上 街との繋がりを考えることは重要ですね。それと更新という点では、日本のスクラップ&ビルドによる建て替えを考え直す時期に来ていると思います。これからは、長い時間軸の中でずっと生き続ける集合住宅をつくっていかなければいけません。現代では長期優良住宅として100年を超える耐久性のある建物もつくられていますが、長いスパンで建築を維持していくためには、ハードに加えソフト部分も充実させるべきだと思います。住人が手を加えて変えてゆけるなど、さまざまな仕掛けが上手く機能し、長く住み続けられる建物が求められているのではないのでしょうか。

大栗 長く住むためには、コミュニティも重要になりますね。向こう3軒両隣のような日本の古いコミュニティの関係を現代の集合住宅でもつくりたいかと思うのですが、なかなか難しい。そのようなコミュニティを形成することに価値を認め、お金を払ってもよいと思えるような環境が整わないと実現は難しいですね。

池上 コミュニティ形成については、プライバシーとセキュリティの問題があります。集合住宅は戸建てよりもプライバシーとセキュリティの確保が求められ、自ずと近所付き合いも閉じた関係になりがちです。かつて、各住戸のバルコニーが繋がっていて、そこを住人が行き来できるパブリックな場所ようになっていたり、井戸端会議ができるような場所が共用廊下に計画されたマンションもありましたが、なかなか定着しないのが現実です。つまり、ハードだけでは駄目なのだと思います。

大栗 しかしながら、そのコミュニティのようなものに上手く価値を見出せていないだけで、日本の現状をどう捉え、何に価値を見出していくのかで、これからの日本の集合住宅のあり方は変わっていくように思います。

隈 集合住宅にコミュニティを求めるというのも日本的な現象なんですよ。世界の集合住宅の流れは、金融資本主義の中心的商品という位置付けで考えられています。日本人はどこかでコミュニティに対するノスタルジーみたいなものがあるって、それを集合住宅に求めているのだと思いますが、それはすごく貴重なことです。

これまでにない新たな価値を見出す

乾 応募者には「日本の集合住宅」という課題だからといって、日本の現状をそのまま肯定したような提案はしてほしくないですね。日本の集合住宅は、戦後という時代背景のもと、量的な拡充を目的としたコンパクトなものが計画されました。それはひとつの成果を生みましたが、生活や人生の多様さをおおらかに受け入れるようなものではありませんでした。それを反省し、私たちは集合住宅のあり方を考え直している最中だと思います。今まで行ってきた集合住宅の計画は、その時代、その条件の下でのものであり、現代は条件が大きく変わってきているということ意識しなくてはなりません。

池上 そうですね。だからこそ、われわれはそれらを顧み、より暮らしやすい集合住宅をつくることを目指しています。日本の集合住宅の歴史は、関東大震災復興後に建設された同潤会アパートから始まったと言えると思いますが、その当時と現代の集合住宅では性能も機能もそう大きな違いはないかもしれませんが、それは、寝食や団らんなどの人の根本的な生活自体がそんなに変化していないからだと思います。しかし一見同じように見えても現代の生活はより豊かに便利になっているのも事実です。日本の集合住宅はこのままでいいのかと考えると、決してそうではないと思うのです。

藤本 つまり、集合住宅のタイポロジーはまだまだ過渡期期なのではないのでしょうか。そのタイポロジーの中にも、セキュリティやプライバシー、都市の更新、街との関わり方といった点でまだまだ応えられていないことが多くあると思います。先ほど乾さんがおっしゃったように、日本の集合住宅をよい意味で批判的に捉え直し、未来をかたちづくることに目を向けてほしいと思います。「日本は凄いいね」というような一方的なアピールをよく耳にしますが、それだけではなく、もっと広がりを持って考えた方がよいのではないのでしょうか。

大栗 現代の日本の集合住宅の問題点を探り、それに対して学生の視点から「こんなことをすれば面白いのでは？」というデザイン案を出してもらいたいと思います。現状を肯定せず、マンションというタイポロジーの可能性を示してほしいですね。

隈 世界的に見ても、日本におけるマンションの

平面計画の画一化は凄いいと思います。日本では、お茶を飲むことひとつとっても「茶道」に極めてしまうように、「住むこと」も「マンション道」と固定して考えてしまっているように思います（笑）。この考えをそろそろ壊してほしいですね。

日本の集合住宅のこれからを問う

——敷地や具体的な条件はどのようにしますか？

乾 現状の何処に問題を見出すかは応募者に任せるとして、敷地はニュータウンの一部にするのでしょうか？ 高度経済成長期につくられたニュータウンは今、更新時期が来ていますし、その時に考えられた集合住宅にはさまざまな課題があるように思います。その敷地に新しい集合住宅を考えてもらうのはどうでしょうか。これは今までのコンペでも挑戦してこなかった設定だと思います。

大栗 それはいいですね。ニュータウンは高齢化が進んでおり、そのような問題にどう応えていくのかは大きいテーマです。日本版のCCRC（Continuing Care Retirement Community）が考えられるかもしれませんね。新しく集合住宅が建つことで、藤本さんが仰ったように周りにもよい影響を与え、それによってニュータウンの全体も考えていけますね。

藤本 近くには、駅とかコミュニティ施設があるなど、考える上で手がかりとなるような条件を与えるべきですね。ニュータウン自体がかつての高度経済成長期の日本を代表するタイポロジーでしたが、現代ではどうあるべきかということを知りたいと思います。

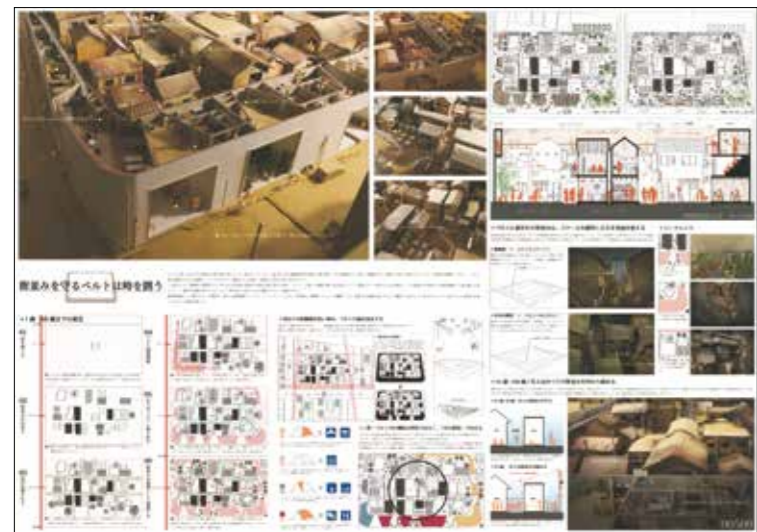
池上 日本の集合住宅のこれからについて根底から考えてほしいですね。

乾 100戸くらいの規模の集合住宅が立ち並ぶ場所の一部を敷地とし、周りと同じように100戸の規模で考えてもらうのはどうですか。周りの集合住宅と同じ密度だけれど、まったく違う提案を求めたいと思います。

隈 例えば、コミュニティを考えた時に、ノスタルジックに昔に戻るのではなくて、この先これからの日本の集合住宅を考えてほしい。規格型マンションをたくさんつくってきて、日本の集合住宅の長所も短所も知りつくしている長谷工コーポレーションが、「日本の集合住宅がこのままでいいのか」と問題提起していることも重要なことですね。第10回という機会に改めて根源に立ち返って考え、これからの日本の集合住宅を真剣に考えてほしいと思います。

——では、今回は「日本の集合住宅」に決定します。（2016年5月19日、長谷工コーポレーションにて

文責：本誌編集部）



第9回「100歳の集合住宅」最優秀賞作品「街並みを守るベルトは時を囲う」池川健太（東京藝術大学大学院）

隈研吾氏。

撮影：新建築社写真部

乾久美子氏。

藤本壮介氏。

大栗育夫氏。

池上一夫氏。